

はしがき

2018年は日中両国にとって、そして筆者の個人史としても、とても重要な年である。まず個人的な話を先にさせていただと、筆者は30年前の1988年に留学のために来日し、名古屋で研究生生活をスタートさせた。それ以来ずっと日本で生活している。

名古屋大学で修士を取得したあと、今はなき長銀総合研究所に就職したが、入社の際の面接のとき「どういう仕事をしたいですか」と質問され、大学院ではアメリカの金融規制を学んだので「アメリカ金融に関連する仕事をしたい」と答えた。しかし人事部から「君は中国人なのだから中国経済に関する調査をしてみよう」といわれた。だったらその質問は何のためだったのだ、と思った。自分は今、中国経済に何の関心もなかった。もし何らかの関心があったら、日本に来ることなど考えなかつたからである。ほとんど興味を持ってない自国の経済分析を行うことには気が引けたが、でも仕事だから、いわれる通りにやるしかない。以来、ずっと中国経済の研究を続けている。

そして、日本にとって、2018年は明治維新の150周年にあたる。日本を近代化したのは明治維新だった。さらに、中国にとって2018年は「改革・開放」から40周年になる。この40年間、中国は良くも悪くも、それ以前とはまるでちがう国になった。日本の明治維新と中国の「改革・開

放」との比較は、本文で述べることにする。

では、なぜこの本を書こうと思ったのだろうか。

一つは、今までの30年間、日本で研究生活を行ってきたなかで、自分自身が自国をどのように認識しているか、一度総括しなければならぬと思つたからだ。もし中国国内で中国を研究したら、必ずしも客観的に被写体を捉えることができないかもしれない。日本に来てよかつたといつても思う。

もう一つは、書店へ中国関連の新刊書を探しに行くが、日本の中国関連の本はあまりにも極論が多く、いつも当惑を隠せない。「仮想敵国」中国は危険な国であるとする中国脅威論や世界制覇をたくらむよからぬ国としての中国陰謀論のかたわら、やがて綻びが生じて足元から崩れ落ちるという中国崩壊論まで、実に激しい議論が繰り広げられている。そのせいも、講演などのとき「中国では実際には何が起きているのか」「中国はどのような国になろうとしているのか」とよく質問される。中国が多様性に富んだ巨大国家であることはたしかだが、巷にあふれる極論を提示する論者たちは、あまりにも個人的な好き嫌いで中国を論じていることが多いため、日本人の読者が翻弄され、五里霧中を彷徨うことになってしまつてゐるのではないか。

こうした二つの実情に鑑み、この本を執筆する目的は、個人的な感情論をすべて取り除いて、もう一度冷静に中国を観察し描写したいと考えたからである。ただし、この本は学術書ではない。一般の読者は中国経済に関する理論分析を知りたいよりも、中国という国そのものを知りたいはずである。中国を知らないまま、中国のことが好きになつたり、嫌いになつたりすることは一番よくないことである。好きか嫌いになる前に、もう少し実態に肉薄した等身大の中国に近づくことが重

要である。

今、日本では、パンダの香シヤンシヤンがブームになっている。中国はパンダの生まれ故郷だが、日本と中国のつながりは、それだけではない。また、少なからぬ日本人が『三国志』の愛読者である。しかし、魏呉蜀三国鼎立の時代は数千年の中国史のなかでわずか一瞬にすぎず、中国の歴史はそれよりも遙かに長く複雑である。同様に、中国人の心も日本人が考える以上に複雑なものである。

筆者は個人的に中国経済を研究しているのだが、経済理論をもって中国経済を考察するだけで中国という国の全体像を描くことには限界があると感じている。経済には必ず社会の内実と結びついた複雑な事情が存在し、より真実に近づくには、その隠れた部分をも明らかにしなければならぬからだ。一方で、足元の中国社会と中国経済を説明しようと思っても、なぜこうなっているかについて納得のいく説明ができない場合がある。やはり歴史的な観点から中国を鳥瞰しないと、中国の真相を解明できない。

しかし、この点は筆者にとって一番の難題である。なぜならば、文化大革命のときに初等教育を受けた筆者は、きちんとした歴史教育を一度も受けたことがない。たとえば、中国の教科書では、中国を統一した秦の始皇帝が国を統一した功績だけが讃えられているが、後日日本で歴史書を紐解き、始皇帝が実際はたいへんな暴君だったことを知ったとき、大きなショックを受けた。同様に、太平天国の乱は封建社会を打倒する農民一揆として総括されているが、実際は、いたるところで虐殺を繰り返す邪教徒の乱だった。したがって、現在の中国を知るために、まず中国の数千年の歴史を正しく知る必要があった。筆者にとって、間違った歴史観を正すことが先決だったのである。振

り返れば、今までの十数年間、一番多く読んだのは経済学の書ではなく、大半が歴史書だった。

現在では、たいへん幸いなことに、中国の若手の歴史学者の一部は、史実を明らかにしようとする大限の努力をしている。社会主義中国の歴史観は歴史上の人物を白黒の二分法で分けることだった。しかも現在の政治的必要性から史実を曲解することが多かった。米プリンストン大学で共産党の歴史を研究している馮勝平氏は、「史実を捻じ曲げることができて、史実に含まれるロジック（論理）を捏造することはできない」と述べている。ある意味では、歴史を勉強することは史実を知るよりも、歴史の論理を勉強することがよほど重要である。

日中戦争史をめぐる日中の対立は、戦後70年以上を経た今となつては実に不毛な論争と思われる。なぜならば、その多くはある史実に関する見解の食い違いだからだ。時間が経てば経つほど、史実の一部は説明できなくなる。また、日中双方の立場のちがいにより、史実の描写は大きく異なることも、ある意味では当然のことである。むしろ、日中戦争がなぜ引き起こされたのかの背景を論理的に説明することのほうが、何よりも重要であると考ええる。

中国国内で、いまだに文化大革命の原因や責任の究明は公において認められていない。しかし、幸いなことに一部の知識人は私的に文革の体験者と当事者に対するインタビューを「口述歴史」のかたちで保存する活動を行っている。そして、アメリカで文革研究を行う中国人研究者も、当事者に対するインタビューを記録している。これらの努力は中国の現代史研究において最も重要な功績として記録されるだろう。

現在、中国ではいまだ言論の自由が十分に保障されていないが、40年前の中国は今の北朝鮮とき

わめてよく似た国だった。それを考えれば、わずか40年で、世界で最も古い国の一つの中国がここまで進歩したのは、むしろ驚きである。中国の先行きに関する悲観論は往々にしてその進歩に対する期待と現実の進歩の遅さのギャップによるところが大きい。

筆者は30年前に上海から鑑真丸というフェリーに乗って日本にきた。上海市中心部に位置する上海港を出発した鑑真丸はゆっくりとしか進まなかった。揚子江の河口までは半日もかかった。なぜもっと速く走らないのか、と乗組員に尋ねたら、「川だから速く走れない」といわれた。

もちろん、中国という巨大国家の舵取りは鑑真丸を操縦することよりも遥かに複雑な作業となる。

指導者自身も歴史的限界性によって視野が塞がっていることもある。とくに、「改革・開放」はそれまでの社会主義計画経済と完全に決別してリスタートしたわけではない。毛沢東時代の負の遺産を引きずりながら、中国は鄧小平がいう渡り石を叩いて一歩前進してまた半歩後退するという困難な歩みを辿ってきた。でも、大まかな方向性についていえば、中国はゆっくりでありながらも前進している。逆に、中国のような巨大国家は猛スピードで走りだした場合、それこそ恐ろしい結末になるかもしれない。

イアン・ブレマは今の世界をリーダー不在のGゼロの時代と定義している。そのなかで中国の躍進はグローバル社会にとり大きなリスクとなると指摘されている。なぜならば、中国は独自のルールに則って行動してくるからである。要するに、中国が世界のリーダーになろうとしていることは主要国には受け入れられない。本書で議論する最重要課題は中国がグローバル社会の本当のリーダーになれるかどうかである。

筆者は1994年に長銀総研に入所以来、日本経済新聞社出版局（当時）の書籍編集者だった増山修氏の知遇を得て、機会あるごとに同氏に激励されながら、来日から10年がかりの研究の集大成として2007年『中国の不良債権問題』を同社から上梓した。それから10年経過し、増山氏は慶應義塾大学出版会に移籍されたが、その間も常に「柯さん、そろそろその後の成果をまとめられたら」とお誘いを受けてきた。今回、その機が熟したのを見計らってこの本が誕生したのである。ふたたび本書執筆の機会を与えてくれた増山氏に感謝したい。

この本は執筆当初から学術書として書こうとは思わなかった。一つは個人的な能力の限界によるものである。もう一つは上述のように、日本にある中国論の本に充満する極論を看過できないからでもある。落ち着いた冷静な議論をして本当の中国に少しでも近づければ幸いである。

ここ数年、筆者を取り巻く研究環境にはいろいろな変化があった。幸いにも富士通総研の本庄滋明社長は「自由にどんどん情報発信をしてほしい」と比較的自由な研究活動を認めてくれた。そして、筆者所属の経済研究所小村元所長・常務取締役から「柯君は、中国リスクに関する研究をもっと深めてほしい」と日ごろ筆者の研究に理解を示してくれている。ここで謝意を表したい。また、富士通総研の前会長・伊東千秋氏は、常に筆者の研究を励ましてくれたことに感謝したい。さらに、日ごろの研究活動とさまざまな企画の相談に乗ってくれる富士通総研の広報担当・香田隆氏と相原真理子氏の二人にも心からの謝意を伝えたい。日ごろの研究活動を支えてくれている研究アシスタント・眞野美香氏にも感謝する。

30年前、私費留学生として名古屋へ留学するにあたり、身元引受保証人になっていた浅野

彰氏は、筆者のことを実の子どものように見守ってください。ご家族の皆さんにも温かく接していただいている。ここで心より謝意を表する。また、名古屋滞在中、一番最初に下宿させていただいた故・黒川欽吾家の皆さんにも感謝したい。

30年前に留学のために来日したが、筆者の両親は今も南京で生活している。「論語」には、「父母在、不遠遊」との教えがあり、多少親不孝とも反省しているが、幸い、二人とも高齢ながら、大病もなく健在である。

最後に、南京で安定した公務員の仕事を持っていた妻は仕事を辞め、一介の私費留学生として来日を決意した筆者について日本に来てくれた。その勇気と信念と愛情に感謝したい。そしてこの30年間、妻と娘に多大な迷惑と心配をかけたことに心よりお詫びする。

2018年初春

柯 隆

著者プロフィール

柯 隆 (か・りゅう、Ke Long)

1963年 中華人民共和国・江蘇省南京市生まれ。

88年来日、愛知大学法経学部入学。92年、同大卒業。94年、名古屋大学大学院修士課程修了（経済学修士号取得）、長銀総合研究所国際調査部研究員（98年まで）。98～2006年、富士通総研経済研究所主任研究員、06年より同主席研究員を経て

現在 東京財団政策研究所主席研究員、静岡県立大学グローバル地域センター特任教授。

この間、中国浙江大学客員教授、財務政策総合研究所中国研究会委員、JETRO アジア経済研究所業績評価委員、慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所客員研究員、広島経済大学特別客員教授、国際経済交流財団『Japan Spotlight』編集委員（継続中）等を歴任。

母国の経済関連諸機関や官庁、企業とのつながりも厚く、日中をつなぐコーディネート役を数多く務めるほか、NHK（クローズアップ現代、日曜討論、ニュースウォッチ9など）、フジテレビ（BSプライムニュースなど）、テレビ東京（ワールド・ビジネス・サテライト、BS Japan プラス10など）に出演多数。外国メディア（BBC、中国 CCTV、ブルームバーグなど）への出演や講演、主要メディアへの寄稿も多数。

主著

『中国の統治能力』（共著）慶應義塾大学出版会、2006年

『中国の不良債権問題』日本経済新聞社、2007年

『チャイナクライシスへの警鐘』日本実業出版社、2010年

『爆買いと反日』時事通信社、2015年 など

このほか論文、レポートを多数執筆・発表している。

目次

第1章 中国的へゲモニーと一带一路…………… 1

1 中国の国是——1

辛亥革命の失敗と中国人の「皇権」への崇拜／国家と個人／中国社会のタブー／国情の摂理

2 中国的覇権——9

幻の「韜光養晦」／覇権を求めない外交のあり方／習近平政権の外交理念／「一带一路」構想の真の狙い

3 中国人の世界観——19

世界の中心に位置する国／誇りと井戸の中の蛙／拝金主義に走る中国社会の激変ぶり

4 なぜマルクス主義が依然崇拜されるのか——26

カール・マルクスの偉大さ／脱マルクスの中国特色のある社会主義／毛沢東思想へ回帰する中国社会の新たな動き／強国の夢を支えるナシヨナリズムの台頭

【BOX】 人民解放軍は国軍なのか、共産党の親衛隊なのか 15

第2章 中華民族の復興と富国強兵の夢…………… 37

1 中国人にとつての「愛国」—— 37

2 共産党にとつての経済発展の意味—— 40

失墜する毛沢東の権威／共産党政権の正当性／資本主義に傾く中国的社会主義市場経済

3 格差拡大の落とし穴と資本家の造反—— 49

良い格差と悪い格差／都市開発と土地改革の落とし穴／同床異夢の関係にある共産党政権

と資本家

4 エンドレスの反腐败キャンペーン—— 58

なぜ共産党幹部は腐敗するのか／なぜ習近平政権は反腐败に躍起となるのか／習近平国家

主席は明君になれるのか

5 責任ある強国のかたち—— 66

世界が震撼する獅子の目覚め／G2と責任ある強国のあり方／トランプ政権下の北東アジア

アの平和と繁栄

第3章 鄧小平の目指したもの——なぜ彼は毛沢東を否定しないのか……………75

1 「典型的な四川人」鄧小平——75

2 共産主義者としての鄧小平——77

神になれなかった鄧小平の人物像／鄧小平は共産主義者なのか／権力至上主義の鄧小平思想

3 鄧小平時代の中国政治——85

革命家としての鄧小平／建設者としての鄧小平／改革者としての鄧小平

4 鄧小平時代の中国外交——92

対ベトナム戦争／鄧小平の平和外交／「一国二制度」のわな

5 鄧小平の負の遺産と鄧小平時代の終焉——100

後継者選定の過程の謎／權威なき権力の不安定性／鄧小平時代の終焉の意味

第4章 文革世代の統治と毛沢東思想への回帰……………109

1 中国の近代化への道筋——110

2 教育と文化の断層——113

知識人に対する弾圧と教育破壊／文明の破壊／独立思考を妨げる行き過ぎた受験勉強

3 文革世代のリーダーの世界観——119

毛沢東に洗脳された人々／中国社会を変えたある日本映画／文革世代の再登場

4 リベラル勢力の抵抗——128

リベラル勢力の主役／普遍的価値観vs核心的価値観／日本の政治と中国の政治

5 管理される国家への道——136

文革世代が描く国家像／経済への統制強化／国家の役割と市場の役割

第5章 「改革」と「開放」の矛盾……………145

1 「改革・開放」の真の推進者——146

2 鄧小平時代の到来と終焉——149

「改革・開放」への出発点／改革者と保守派の両面を併せ持つ鄧小平／独裁と集団指導体

制

3 「四不像」のような中国市場経済の実態——157

なぜ計画経済は失敗したのか／万能でない市場メカニズムと市場経済のあり方／「四不像」

のような中国的社会主義市場経済

4 成長の大義と構造上の歪みの増大——164

中国経済の発展と比較優位戦略／ファンダメンタルズの変化と構造転換の必要性／ハイテ

ク化しない中国製造業の体質

5 中所得国のわなと長期低迷への道の可能性——171

中所得国のわな／信用なき市場経済の行方／中国経済長期停滞の可能性

補論——中国の経済統計は信用できるのか——177

経済統計の取り方／マクロ経済統計の操作／GDPが過小評価される可能性／統計法の制
定とマクロ経済統計の改善

【BOX】 大学教員がもたらう灰色収入の事例 188

第6章 国有企業——社会主義計画経済の亡霊………195

1 「企業」と「公司」——196

2 国营企業から国有企業への歩み——198

「公私合営」による資本家に対する略奪／国营企業と歪んだ産業構造／共産党組織と都市
労働者の関係

3 「改革・開放」以降の国有企業改革——207

「政企分離」改革／証券取引所の誕生／近代的企業制度の構築と「摺大放小」／「国進民
退」の弊害

4 統制経済への回帰——216

大型国有企業の統合とその狙い／国有財閥の誕生を夢見る野望／国有企業の存在こそ中国経済の構造問題

5 国有財閥を作る夢とゾンビ国有企業の亡霊——223

中国における too big to fail の大型国有企業／政府、国有企業と労働者のモラルハザード
／国有持ち株会社とコーポレート・ガバナンス

【BOX】 大躍進と大飢饉 203

第7章 一帯一路構想と習近平政権の国際戦略……………231

1 世界の中のグローバリズムと保守主義——232

2 グローバル社会の主役交替——236

なぜアメリカの製造業は競争力を失ったのか／TPPを頓挫させたトランプ政権の代償／現実味を帯びる「一帯一路」構想

3 中国主導のグローバル化と摩擦——243

米中貿易戦争の可能性／中国型グローバルイズムのあり方／「一帯一路」構想が直面する課題と今後の展望

4 習近平政権のグローバル戦略——250

経済外交の行方／喉に刺さった魚の骨のような台湾問題／朝鮮半島危機をめぐるデール

5 高まる東アジアの地政学リスク——259

政治の世代交替と対立の先鋭化／グローバル政治の混乱は新時代の到来を予兆している／

強いリーダーか集団指導体制か

【BOX】 Gゼロの時代と中国の役割 235

第8章 IT革命と中国社会の変革……………

1 スピードは金なり——268

IT革命で大きく変わった世界経済／中国にとっての「両刃の剣」

2 言論の自由の壁——271

「莫談国事」の伝統／インターネット普及に伴う言論の自由／世界インターネット大会

3 中国のネット通販の限界なき可能性——278

中国の景気減退と経済の構造問題／電子商取引の役割と発展の可能性／中国における電子

商取引の発達／中国における電子商取引の主なトレンド／越境電子商取引のさらなる発展

の可能性／中国電子商取引はどこまで伸びるか——展望と課題

4 なぜ中国は世界一の FinTech 大国になっているのか—— 294

中国のインターネット事情／中国の金融制度の内実／中国におけるビットコイン取引とそれに対する規制／中国における FinTech の伸長／FinTech 発展の条件

第9章 制度論からみた「改革・開放」政策の行方…………… 309

1 中国経済・発展の「謎」—— 310

2 明治維新と中国の「改革・開放」—— 313

明治維新の内実と意味／洋務運動と戊戌の変法／「第二次洋務運動」の「改革・開放」の行方

3 「改革・開放」を制度論から考える—— 320

制度とは何か／人治と法治／格差が拡大する社会主義国の内実

4 経済発展と「改革・開放」のあり方—— 329

問われる共産党統治の正当性／腐敗をもたらす制度的背景／行き詰まる独裁政治の行方

【BOX】 厳慰氷事件からみた中国の人治 327

【BOX】 両立できない「開放」と「専制」 336

第10章 中国が「強国」になる条件……………

339

1 始皇帝と毛沢東——340

2 習近平政治のDNA——343

「大国」の夢は「強国」になること／暴政の論理と特徴

3 チャイニーズ・パワーのあり方——348

血縁とファミリーのパワー／チャイニーズ・パワーの源泉／チャイニーズ・パワーの持続可能性

4 問われる習近平政権の国家像——354

統制された国家への回帰とそれに対する抵抗／個人崇拜と指導者偶像化の弊害／習近平国家主席の国家像

5 中国は「強国」になれるか、その条件とは——363

大きな経済を強い経済にする必要性／軍事大国になれるのか／強国には強い文明力が不可欠

【BOX】 習近平の改憲と法制から法治への転換 361

あとがき——強国になろうとする中国と日本の対中戦略 371

参考文献 381

装丁
デザインフォリオ
（岩橋香月
佐々木由美）

第1章 中国的へゲモノーと一帯一路

1 中国の国是

中国とは、どのような国だろうか。中国では多くの国民は、生まれてから死ぬまで自分の村からさへ一步も出たことがない。そもそも誰が中国人なのだろうか。中国人の多くは「漢民族」である。中国の文字は「漢字」であり、中国語は「漢語」といわれている。漢民族以外の数多くの少数民族も中国の一部で、民族団結という観点から少数民族を排除してはならないが、あくまでもマイノリティである。

中国を歴史上初めて統一したのは秦の始皇帝だったが、ではなぜ中国人は自分たちのことを「漢民族」と呼び、「秦族」と呼ばないのか。アイデンティティの帰属意識について、秦の始皇帝はたしかに中国を統一したが、一方で焚書坑儒などにより民族文化の多くが壊されてしまった。秦王朝はトータルしても20年と続かなかつた。その後の2000年余りの中国文化の基礎を築き上げたのは、秦が亡びたあとと成立した漢王朝だった。前漢と後漢を合わせれば、約420年も続き、土地の制度や官僚システムなど、ほぼすべての制度と文化の基礎を築き上げたのがこの漢王朝だった。だ

からこそ中国人は自分たちのことを「漢」民族と呼んでおり、文字は「漢」字であり、言葉は「漢」語と呼ぶのである。

かつて宇宙飛行士は宇宙から万里の長城が見えたといわれたことがある。この伝説は本当かどうか定かではなく、のちに宇宙から肉眼では万里の長城は見えないと証明されたが、このような話ができるほど、中国の地図をみると、北方民族の侵略を防ぐ万里の長城はやはりとてつもなく長大な遺跡である（ただ、歴史において長城は北方民族の侵略を防ぐことができなかつたが）。

そして、中国人にとつて、中国文化の発祥は東西を流れる黄河だつた。黄河は黄土高原を流れ、中原地帯を灌漑し、豊かな中国文化を育んだ。近年の研究では、四川省の出土品から中国文化は黄河流域だけでなく、長江（揚子江）流域も中華文明の発祥の地であることが判明した。

中国文化の一つのユニークなところは周辺諸国との朝貢関係の締結である。しかし、朝貢は小国を植民地としてその資源を略奪するための枠組みではない。どちらかといえば、華夷秩序と呼ばれる朝貢は周辺諸国へ中原文化を輸出するための枠組みだつた。だからこそ朝鮮半島は漢字や漢詩など中国文化の影響を強く受けていた。同じようにベトナム北部は今でも中国文化の影響が残っている。一方で、ロンドンの大英博物館やニューヨークのメトロポリタン博物館とちがつて、中国の博物館には外国の文化財の陳列が皆無に等しい。なぜだろうか。古代中国人は自分たちの国が世界の中心であり、中華文明よりも優れた文明はほかに存在するはずがないと勘違いしていたから、他国の文物を持ち帰り、展示などするべくもなかつたからだ。歴史的に中国人が海外から輸入または略奪したものなかで最も多いのは、象牙などの類である。だからこそ中国人は、中国は覇権主義的